

沿岸地域の「水の神さま」が繋ぐ
水と人の歴史文化伝承プロジェクト報告書



沿岸地域の「水の神さま」が繋ぐ 水と人の歴史文化の伝承を引き継ぐ

地域の人々が水と深く関わってきた歴史を読み解く鍵となるのが「水の神さま」です。MELON水部会では、その「水の神さま」を放置すれば、開発や世代交代により自然に消え、古の人々の水への畏怖の思いを後世に伝えられなくなるとの危機感から、これらの調査を始め、仙台市内の34社（神）をMELONのウェブサイト上に掲載しました。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、これら水の神さまにもさまざまな被害をもたらしました。斜面の崩壊、落石等により近づくことができなくなったものや、鳥居や境内社の石碑が倒壊したもの、その安全を願って水神碑が立てられた堰や堤が壊されたものなどがありました。津波に襲われた沿岸部では社殿や鳥居、石碑が流されて跡形もなくなったところも見られました。

その後、巨大防潮堤や住宅地のかさ上げ等の復興工事が進められる中、これら破壊された水の神さまの再建が遅れていることから、水文化の歴史が継承されなくなるとを危惧して、2014年に沿岸地域の調査を行いました。

漁や航海の安全や豊漁を祈願した水の神さまとして「八大龍王」「弁財天」「海神」などが一般的ですが、沿岸部では「八幡神社」などでも「航海の安全」「大漁祈願」が祈られていました。反対に、最初は水の神さまとして祀られ、地域の人々の生業の変化に伴って「豊作祈願」「身体健康」「家内安全」「交通安全」などのさまざまな効験が追加されたと思われるところもありました。

また、震災前から神社の社務所が地域の会合の場となっていて、その再建が地域コミュニティ復興の精神的な支えとなっている例が多く地域で見られました。一方で、水神碑が破壊されたまま放置され、再建の困難さを見せつけられたところもあります。

再建には資金も必要であることから、地域に人々が戻り、笑顔を見せるようになるまで、地域の生業の復活をじっくり待つという声も聞かれました。

ここでは、地域の方々へ聞き取り調査をした沿岸部の水の神さまの中から12社を掲載します。

水の神さまとは

「水の神さま」は水源や滝、河岸や沿岸に、水に関わる願いを込めて、地域の人々の水に関わる思いを込めて祀られてきた神さまのことです。

私たちは「水の神さま」を「水神」「雷神」「龍神」「湯神」「井戸神」「不動尊」「弁財天」「仏像」など水にまつわる神さまや仏さまの総称として扱っています。

目次

はじめに	1
目次	2
五十鈴神社	4
荒澤神社	8
荒島神社	10
上山八幡宮	13
大島神社	16
白鬚神社	20
浪分神社	22
八大龍王碑	25
五柱神社	28
淵上蛸薬師瑠璃光如来堂	31
湊神社・富主姫神社	33
浪切地藏尊	36
参考資料	38
おわりに	39



	水の神さま	地 域	調査日
1	五十鈴神社	気仙沼市魚町	2014年10月19日、2015年1月17日
2	荒澤神社	南三陸町志津川字袖浜	2014年10月27日、2014年11月24日
3	荒島神社	南三陸町志津川字大森	2014年10月27日、2014年11月24日
4	上山八幡宮	南三陸町志津川字上の山	2014年10月27日、2014年11月24日
5	大島神社	石巻市住吉町	2014年11月16日、2015年2月28日
6	白鬚神社	東松島市野蒜	2014年8月17日、2015年2月28日
7	浪分神社	仙台市若林区霞目	2014年3月8日
8	八大龍王碑	仙台市若林区荒浜	2014年8月29日、2015年3月16日
9	五柱神社	仙台市若林区藤塚	2014年10月23日、2014年12月7日
10	淵上蛸薬師瑠璃光如来堂	仙台市太白区長町	2014年3月8日、2014年5月21日
11	湊神社・富主姫神社	名取市関上	2014年11月29日、2015年2月24日
12	浪切地藏尊	亘理町荒浜	2014年9月8日、2014年11月29日

地域での呼び方「お神明さま（おしんめいさま・おしんめさま）」

五十鈴神社

所在地住所・行き方

- 住 所：気仙沼市魚町2-6-7
- 行き方：気仙沼駅前バス停より 大船渡線BRT上鹿折線・路線バス御崎線で乗車、「坂口」バス停で下車。
徒歩約2分（2015年1月23日現在の路線）
- 近くの川、海：気仙沼湾、鹿折川



五十鈴神社全景

縁起・由緒・伝承

御祭神

「天照皇大神」

（相殿神 八雲神社「素戔鳴大神」、大海津見神社「大海津見大神」）

由緒

応永年中（1394－1428）に当村の丸森（現在の気仙沼駅近く）に建立されたと言われる。その後慶安年中（1648－1652）に現在の神明崎に遷座したが、今でもその丸森を「お伊勢前」と呼び、斗螢稲荷神社なのに神明鳥居が残っている。

約600年前も昔からこの地方の産土の神として崇敬され、神明崎に移ってから350年になるが、神殿の二神（素戔鳴大神、大海津見大神）が合祀されて、いっそう家内安全、海上安全、産業振興、大漁満足、交通安全などの御神徳の高い神社として広く尊信されている。（パンフレットより）

他に境内には、猪狩神社（気仙沼湾に海苔養殖と製塩技術を導入した猪狩新兵衛翁の霊を祀る。社地が龍神の社地と伝えられているため、龍神社と合祀してある）、産霊神社（かつては妙見神社と呼ばれ天之御中大神・高見産霊神・神皇産霊神を祀る）が祀られている。



神明崎 各神社・見どころ



猪狩神社 立派な龍が彫られていた

周囲の様子と見どころなど

■周囲の様子

魚町は気仙沼港や国の登録有形文化財であった「男山本店店舗」がある港町であったが、東浜街道を挟んで海側は家や工場の基礎だけが残る更地が多い。内陸側も津波の被害を受けた家が残っており、4年弱が経過した地域にはまだまだ津波の影響が色濃く残っている。



神明崎から見た港町

■見どころ

気仙沼湾に突き出す神明崎の標高15m岩場に立つため、気仙沼湾が一望でき港に着く数々の漁船や海の先には、湾の入り口にある東北地方最大の有人島・大島の亀山山頂が見える。

かつて神明崎の見どころであった崎に沿うように海の上にはかけられた橋道「浮見街道」の東屋「浮見堂」、浮見堂の東にあった石像「恵比須尊像」は、津波によって姿を消した。今は壊された「浮見街道」の一部を見ることができる。



港町から見た神明崎

神社の南側参道には「管絃窟」という鍾乳洞がある。（かつては鳴洞窟と呼ばれ潮の干潮によって妙なる音を立てたというが、今は聞かれない。）神明崎の岩山には鍾乳洞がいくつかあり、管絃窟は海に繋がっていて、岩肌が映って見えるほど澄んだ水があった。

また境内は原生林が残り古来より「百樹園」とも称され、市指定天然記念物「モクゲンジ」や「白花タンポポ」「菩提樹」「ひとりしずか」など200種とも言われる多様な植生を見ることができる。



管絃窟

震災とその後のようす

境内は、標高約15mの神明崎の上にあるため、宮司の住居や社殿には震災による大きな影響はなかった。しかし、震災時には神社に通じる北側の裏階段は半分位まで瓦礫に埋まり、現在も境内の石碑がいくつか倒れて壊れたままで、神社の下は鳥居が崩れたり歌碑が倒れたりしていた。

●神明崎南の鳥居が崩れた。

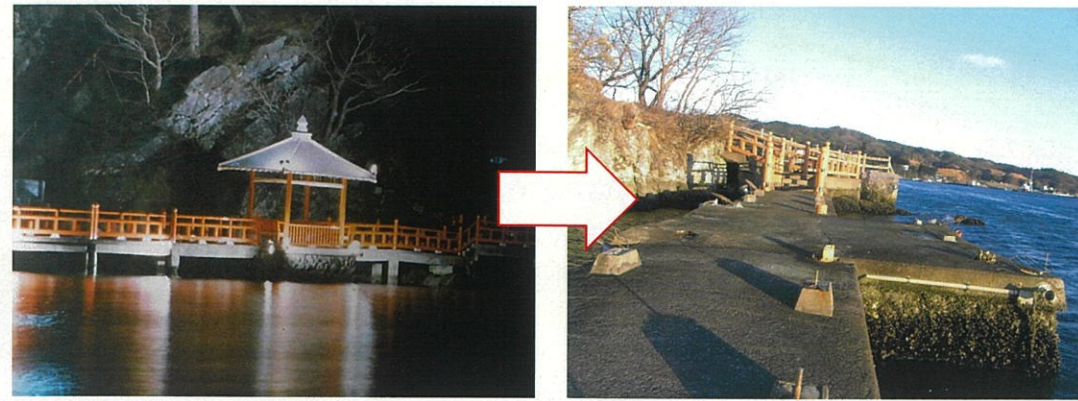


鳥居の支柱の痕跡



倒壊した鳥居の支柱

●浮見堂が流され、手すりも壊れた部分があるため、一部通ることができなくなった。

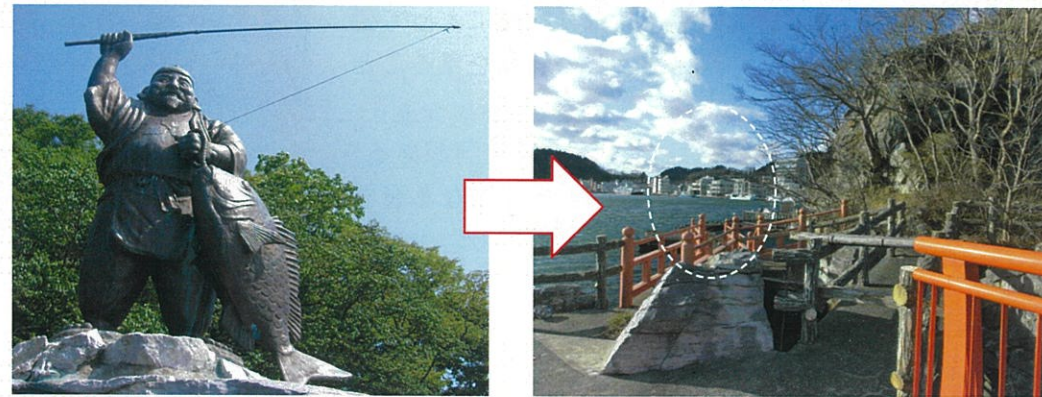


震災前：ライトアップされた浮見堂

震災後：根本の跡だけが残る

神明崎の周囲を囲むように遊歩道「浮見街道」があり、東屋「浮見堂」があったが、浮見堂は今はなく、街道も手すりが流されている部分もあった。昭和63年（1988）に神社から市の観光施設として寄付され、四季を通して気仙沼湾の眺望が楽しめる場であった。

●恵比須尊像が流された。



震災前：恵比須尊像（Wikipedia）

震災後：跡形なく姿を消した

浮見堂の東端に大漁祈願のシンボルとして建立されたが、どこにあったのか分からないほどすっかり姿を消してしまった。

地域の人々とのかかわり

■祭事

春まつり（浦まつり）大海津見神社 旧3月27日
夏まつり（天王祭）八雲神社 旧6月15日：神輿渡御
秋まつり（神明祭）五十鈴神社 旧9月11日

五十鈴神社は漁業関係者が多く住む魚町・太田・入沢・陣山地区の住民の氏神として「お神明さん」と親しまれてきた。

お話を伺った宮司によると、震災で地域の方々がいなくなり、自治会や行政区の組織がなくなったため、今は総代だけで行事などは行っているとのこと。そろそろ土地のかさ上げが終わって復興住宅ができれば、住民も戻ってくるため、以前と同じような組織ができるだろうと期待している。地域の人たちがいなければ神社は機能しない。

現在も元朝祭と季節の祭りは行っている。祭りの時は地域の人たちが来るが、神社で神輿を出

す祭りがあるものの、今は地元に住民がいらないため中止しているそうだ。元朝参り（初詣）の人数も減ったままで、遠くに行った方はまだ参拝していない方も多いのではないかとのこと。

総代の人数は3分の1ほどになったが、震災だけではなく年齢的な理由もある。今地域がこの状態なので、増やそうとはしていないが、もう少し落ち着いてから組織の再編成をしないと…、と思っているとのことであった。



宮司からお話を伺う

近くの神さま

「一景嶋神社」（気仙沼市弁天町1丁目23-1）

五十鈴神社から約2.2km南、ホテル一景閣のそばにある。

3.11の津波により社殿が流されたため、現在は神社庁などの支援で仮の社殿が作られている。

■由緒

「市津伎島姫命」、「弁財天」を祀っており、大漁を祈願する港の守護神であった。また、義経伝説に登場する義経の恋人「皆鶴姫」の漂流地として知られている。



震災後に建てられた仮社殿

■周囲の様子

現在、地域一帯が1.8mのかさ上げ工事中。五十鈴神社と同じ宮司が務めており、お話によると、神社もかさ上げされた場合、名所の岩が3分の1埋もれてしまうため、神社の敷地はかさ上げしないようにしてもらったとのこと。ただ、周囲より低くなってしまうため、排水対策が必要と考えているとのことであった。

■見どころ

神社が所在する島の岩はウミリュウ化石の石灰岩で、その地面から突出した岩々の力強さと岩肌が見どころの一つ。元は気仙沼湾に浮かぶ岩礁で「浮島」とも称される景勝地であったという。昭和31年（1956）に埋め立てられて魚市場が移設設置され、島は一景島公園として整備された。



突出した岩が印象的な一景島神社

地域での呼び方「荒澤(あらさわ)神社」

あらさわじんじゃ 荒澤神社

所在地住所・行き方

- 住所：南三陸町志津川字袖浜56
- 行き方：気仙沼線BRT志津川駅バス停から県道221号線を東方向へ車で約10分
- 近くの川、海：志津川湾



荒澤神社本殿

縁起・由緒・伝承

御祭神

くにとこたちのみこと かぐつちの たつたひこがみ ひめ
国常立命、迦具槌神、龍田彦神、龍田姫神

効験

安全祈願

縁起・由緒・伝承

荒澤神社は、貞観年間(859-877)に大和国龍田神社(奈良県生駒郡三郷町)より分霊・創建されたと伝えられ、龍田明神と称していた。

その後、元久年間(1204-06)に文覚上人(1139-1203)が修験寺院を開基し、荒行を行った滝の場所に不動明王を祀ったため、滝不動と呼ばれるようになった。

その後荒廃してしまったが、慶長14年(1609)に仙台藩主伊達政宗が社殿を再興し、和光院という寺院として存続された。

安永3年(1774)の「本吉郡南方荒砥浜風土記御用書出」には、不動堂との記載があり、村の総鎮守であった。本尊は木仏立像で寛盤大師作と伝えられている。

その後、明治4年(1871)の神仏分離で、荒澤神社と改号し、志津川の八幡神社とともに村社に列することになった。

社宝である「紺紙金泥大般若経」は、平泉中尊寺の国宝「紺紙金字一切経」の中の1巻に相当すると考えられており、県指定有形文化財である。これには、藤原秀衡が建立した田束山寂光寺の什物であったものが伝わったとする言い伝えがある。「紺紙金泥大般若経」の見返しのは金は銀泥で描かれた仏功德の図で、施眼と剃髪を線描きで表しているという。(ウェブサイト「南三陸町VIRTUAL MUSEUM」による)



南三陸町教育委員会の案内板



不動堂



不動明王

周囲の様子と見どころなど

■周囲の様子

荒澤神社の鳥居のところから県道を挟んで、袖浜漁港を一望できる。静かで穏やかな港の中に停泊している漁船の様子が手に取るように見える。



神社入口から袖浜漁港を望む

■見どころ

●太郎坊の杉

神社は鎮守の杜で囲まれており、社殿の後方には推定樹齢800年以上、根まわり1.7m、樹高約42mの太郎坊の杉が立っていて、荒澤神社のシンボルとなっている。この杉は、県内有数の巨木として昭和30年(1955)3月25日、宮城県天然記念物に指定された。

慶長14年、仙台藩主伊達政宗が、仙台城の大手門前を流れる広瀬川に大橋を架けるため、荒澤神社の境内の大杉を25本切り出し、筏に組んで海上を仙台城下まで運んだ。その時、御神木として残された2本が、太郎坊の杉と次郎坊の杉だった。しかし、樹高45mの次郎坊の杉は、昭和33年(1958)の台風により倒壊してしまった。(境内案内板「荒澤神社(和光院)」「太郎坊の杉」による)

現在も太郎坊の杉には、しめ縄が巻かれ、御神木として大切に保存されており、400年前のうっそうとした杉木立を思い起こさせてくれる。



神社入口



太郎坊の杉

震災とその後のようす

■震災前

遠藤芳男宮司によると、次郎坊の杉が台風で倒れた後には、東京から業者が来て、根こそぎ持って行った。その後、次郎坊の杉がどのように利用されたのかは不明という。

■震災後

荒澤神社の本堂のところまで津波が上がった。道路側にある宮司宅は軒先まで津波被災し、室内が全部流されたが、復興ボランティアは来なかったので、宮司の家族で境内やお堂を片付けた。

また、太郎坊の杉の横には小さな溪流が流れる谷間があるが、津波により、袖浜港から押し出された漁船がこの谷間へ入り込んでしまった。この漁船を取り除くために解体したという。(農家レストラン「松野や」女将談)

地域の人々とのかわり

遠藤宮司によると、袖浜、平磯、荒砥の3浜が氏子地域で、220の氏子があり、総代は10人だった。そのうち50~60戸の氏子が津波被災し、現在も仮設住宅での生活を余儀なくされている。平成25年(2013)から祭りを再開したが、集まって来ることができない氏子もあった。

1150年の歴史を誇る荒澤神社だが、被災した氏子が多いため、以前のようなコミュニティを取り戻すよう、現在も宮司や総代が努力している状況である。

地域での呼び方「荒島（あれしま）神社」

あれしまじんじゃ 荒島神社

所在地住所・行き方

- 住 所：南三陸町志津川字大森162
- 行き方：気仙沼線B R T 志津川駅バス停から県道221号線を東方向へ車で約5分。
- 近くの川、海：志津川湾



荒島神社本殿

縁起・由緒・伝承

御祭神

祭神…綿津見神(主祭神)、豊玉姫命、金山彦神、金山姫神、大物主神、市杵島比売命。

合祀石碑…金比羅大権現、八大龍神、塩竈神社、山神社、山神、素戔男大神(境内の案内板による)

効験

大漁祈願、海上安全

縁起・由緒・伝承

「安永風土記」に、荒島に弁財天堂があったことが記されており、古くから漁業者の信仰を集めていたと考えられる。

その後、荒島の南方にある弁天島に弁天宮が移されたが、一石祠を残すのみとなっていた。

昭和35年(1970)5月24日のチリ地震津波で、町内全域が大きな被害を受けたため、翌年、被害が大きかった沖の須賀(現在の本浜)地区と大森地区にあった金刀比羅大権現建立碑と八大龍神建立碑を弁天宮に合祀し、新たに荒島神社を創建した。(宮城県神社庁ウェブサイトによる)

観光ボランティアガイドの後藤一磨さんによると、荒島神社の弁天宮は、黒崎の弁天神社とともに志津川湾を両側から挟み込むように鎮座しており、ともに志津川湾に財をもたらす守護神として信仰されて来たという。

現在、上山八幡宮の工藤祐允宮司が荒島神社の宮司を兼務している。



工藤宮司から八大龍王碑の説明を聞く



荒島神社正面の鳥居



黒崎の弁天神社
(南三陸ホテル観洋駐車場脇)

周囲の様子と見どころなど

周囲の様子

椿島、荒島、竹島、神割崎などの景勝地が散らばるリアス式海岸特有の美しい景観により、沿岸部一帯が南三陸金華山国定公園の指定を受けている。

荒島は、標高46m、面積約3.1ha(ヘクタール)の島で、距離100m程の歩道(防波堤)で大森崎と繋がっており、島まで歩いて渡れる。

震災後に修復された階段を登り、遊歩道を10分程歩くと、平らな山頂付近に突然真っ赤な鳥居が現れ、その奥に荒島神社が鎮座している。

見どころ

明治の神仏分離の際に、他の志津川湾の島々が全て国有林に編入されたのに対し、荒島だけ民間に売却された。後に町の篤志家が買い戻し、さらに昭和12年(1937)、外港防波堤が完成し大森崎と荒島が繋がると、歩いて渡れる洋上公園として開放された。

荒島にはタブノキの原生林や暖地性草木が自生しており、自然観察にも最適な島である。

日の出と夕暮れのビュースポットとしても志津川屈指の場所とされ、荒島を正面にして左手には、モアイ像を横にしたような岩がある。(南三陸町観光協会ウェブサイトによる)

後藤さんによると、ケヤキなど落葉広葉樹の多い北西側斜面に対し、東側斜面にはタブノキなど常緑樹が多く、その植生の違いを顕著に観察できるのは秋から冬にかけて、とのことである。



突然現れる鳥居



防波堤から見た荒島



津波に流された鳥居の痕跡

震災とその後のようす

震災前

荒島がある袖浜海岸は、古くからの海水浴場で、震災前は、シーカヤックなども体験できる人工の海水浴場(サンオーレそではま)や釣り堀が整備され、休日になると駐車場が満杯になるくらい賑わっていた。(南三陸町観光協会ウェブサイトより)



津波の爪痕が残る大森崎(上部は、荒島に繋がる防波堤)

■震災後

防波堤を歩くと、海水が打ち上げられて来るので、大地震により地盤沈下したことがわかる。防波堤の両側に設置されていた欄干も流出してしまっているため、歩いて渡るのに注意が必要である。

鳥居と防波堤へ続く階段も津波により流出したが、その後階段と手すりの一部が修復された。根元を50cm程残して流出した鳥居の痕跡が残っている。

荒島全体に整備されている遊歩道は、震災前と変わらず、現在も歩いて楽しむことができる。

大森崎付近は、地盤沈下に加え砂の流出があり、さらに現在、大規模な港湾工事が行われているため、海水浴場の再開は未定とされる。

地域の人々とのかかわり

後藤さんによると、チリ地震津波の時、朝方に海の水が引いていたが、地震の揺れを感じなかったので避難しなかった。そのため、町民40名が津波の犠牲になった。この時、町の人々は、火の玉が荒島に飛んだのを見て、神様は荒島に行きたいのだと考えた。

また、この神社の宵祭りに花火を上げたことを契機として、志津川湾夏祭りでも花火をあげるようになったとされる。

防波堤や島の南側の岩場などで、釣りを楽しむ人々を見かけた。また、地元の有志により、荒島の自然観察会が実施されている。



後藤一磨さんから荒島の逸話を聞く



地域での呼び方「八幡神社」

かみのやまはちまんぐう 上山八幡宮



上山八幡宮拝殿

所在地住所・行き方

- 住 所：南三陸町志津川字上の山27-2
- 行き方：気仙沼線BRT志津川駅バス停から徒歩約10分
- 近くの川、海：志津川湾

縁起・由緒・伝承

■御祭神

祭神は、^{ほんだわけのみこと}誉田別命（応神天皇）、^{たきりひめの}多紀理毘売命、^{たきつひめの}多岐都比売命、^{いちしまひめの}市杵島比売命、^{おきながたらしひめの}息長帯比売命（神功皇后）

合祀石碑は、^{こうし}聖徳太子、^{しょうとく}若木山（天然痘の神様）、^{こんこうさん}金剛山、^{こんぎらだいこんげん}金比羅大権現、^{ふるみね}古峰神社など

■効験

五穀豊穰、勝運武運、家内安全、操業安全、開運厄除、学業成就

■縁起・由緒・伝承

前9年の役（1051-1062）で蝦夷征討した^{みなもと}源義家が、石清水八幡宮の御祭神の分霊を勧進したとされる。創建当時は、中世以前にこの地方の中心だった保呂羽山山麓の保呂毛集落に位置し、次いで本吉氏の居城である朝日館の南向かいの惣葉沢に移った。

さらに寛政5年（1793）に八幡川西岸の^{かんせい}塩入（旧八幡町）に移り、明治8年（1875）には、^{そでがはま}袖浜の荒澤神社と並んで志津川（旧本吉村）の村社に列せられ、八幡神社となった。この時、社務所が現在の防災対策庁舎の場所にあり、神社はその隣に鎮座していた。

昭和35年（1960）5月23日のチリ地震による津波により、社務所と幣殿、拝殿が浸水し、境内の樹木のほとんどが枯死した。さらに昭和41年9月、台風の集中豪雨により、神社の前を流れる八幡川が氾濫し再び境内が浸水したため、昭和46年3月、上山緑地に遷座した。

平成2年（1990）4月、社名を上山八幡宮と変更した。（「上山八幡宮ご参拝のしおり」による）
標高329mの保呂羽山山頂に鎮座する保呂羽神社は、役行者が開基したと伝えられるが、上山八幡宮とは表裏一体の関係にあり、保呂羽神社の例祭日には、上山八幡宮から^{えんのぎょうじや}神輿が出て、保呂羽山山頂に安置されて一夜を過ごした後、翌日再び戻ってくる。（ウェブサイト「東北物語」による）



合祀されている石碑（一部）